光と闇のはざまに

織倉正美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇のはざまに

【Ｎコード】
Ｎ８５０５Ｚ

【作者名】
織倉正美

【あらすじ】
ファンタジーのボーイ・ミーツ・ガールものです。
神々の争いに巻き込まれる主人公とヒロインの運命を描いています。

序

「ネルセ・レアディ……おまえからからわざわざ俺を誘ってくれるなんて珍しいな。どういう心境の変化かな？」

そう言って悪戯っぽく笑う黒髪黒瞳の青年を見返して、ネルセ・レアディは深々とため息をついた。

人選、いや神選を誤ったかもしれない……。

しかし協力してくれそうな神のうち、彼以上に力を持つ者はいないのだ。

「イフェ・ラディアス、あなたに頼みたいことがあるんだ。実は……」

「リ・スファノアの馬鹿野郎が、気違いじみたことを企ててるから、それを隠密裏に処理する手伝いをしてほしいっていうんだろ？」

みなまで言わせずネルセ・レアディの言葉を継いでみせて、その驚きの表情を楽しみながら、黒髪黒瞳の青年……イフェ・ラディアスは静かに笑った。

「あなたは……知ってたのか……」

「俺は『耳がいい』からな……。たいていのことは知ってる。なにか、知りたいことがあったら聞きにくるといい。おまえにならなんでも教えてやるよ」

「それなら話は早い……。彼の企ては危険だ。私に力を貸してほしい」

「やだね」

イフェ・ラディアスは、小馬鹿にしたように言うと意地悪く笑った。

「そんな面倒なことを何で俺が手伝わなければならないんだ。そんなことはリ・セスティスにでも頼めばいい。あいつは真面目だし、おまえに惚れぬいてるから喜んで力を貸してくれるだろうよ」

できることならそうしている……。それができないから、こうし

て、こんなやつに頭を下げているのだ。
少年とも少女ともとれる、あるいはその両方でもない繊細な美貌を怒りにふるえさせながらも、ネルセ・レアディはつとめて平静に答える。
「セスティスに頼めばことは隠密裏ではすまなくなる。下手をすればすべての界を巻き込んだ戦乱になりかねない」
「確かに。あいつは真面目だけど融通なんてものは全く利かない石頭だからな。少なくともスファノアの阿呆に決闘を挑むくらいのことはやってのけるだろうな」
神同士の決闘！？　それだけでも界のひとつやふたつに、致命的な天変地異を起こしかねない。
「解っているのならふざけないでくれ！　こんなことを頼めるのはあなたしかいないんだ。だから……」
「なかなか頼み方がうまいじゃないか。確かに俺が協力すれば、あいつの企てを隠密裏に葬り去ることも可能だろうな。まあ、おまえがそこまで言うなら引き受けてやらんこともないが……」
ネルセ・レアディは相手の言わんとすることを察し仏頂面で言葉を継ぐ。
「条件次第ってワケか」
「そういうことだ……条件といってもたいしたことじゃない。おまえ、もう何か策は立ててあるのか？」
イフェ・ラディアスの問いに、ネルセ・レアディはぐっと言葉を詰まらせる。
何も考え付かなかったからこそ助力を求めに来たのだ、なんて言えない。
「そんなことだろうと思ったよ。まあそれならちょうどいい。俺の条件はただひとつ、この件の処理に関して俺に立てた策に従うこと、それだけだ」
イフェ・ラディアスの意外な言葉に、ネルセ・レアディは思わず怒りを忘れて問いかける。

「何か、いい策があるのか！」
「ああ……とっておきのがな。おまえはただ、自らの力のかけらをふたつ用意すればいい。核に使うだけだから、それほど大きなものでなくてもかまわん。それさえ用意してくれれば、後はこっちですべてけりをつけてやる。どうだ？　そちらにとってもかなりいい条件じゃないか？　我ながら気前のいいことだと思うがな……」
　確かにいい条件だ。かけらを渡すのは危険だが、小さい物がふたつ程度なら、悪用するにしても、たいしたことはできないはずだ。
　だが、あまりに話がうますぎる。何か裏があるに違いない。
「私のかけらをふたつ……それを核にしていったい何に使うんだ？」
「媒介に使うのさ。それを利用して奴の崩そうとしている均衡を支えようってわけだ。残念ながら属性の違う俺の力を奴に気付かれずに送るには、それが必要なんでな」
「なるほど。私の力をつかって自分の勢力範囲を広げようって魂胆だな。そのついでに均衡も支えてくれるってわけだ」
「御名答……まどろっこしいけど、それが一番いい方法だろう。違うか？」
　つまりは以前からネルセ・レアディが助力を申し出るのを予想していて、それを利用することを考えていたに違いない。
　最初から引き受けるつもりでいながら、こちらをからかっていたのだ。
　しかし、そういうことなら逆に信用してよさそうだ。イフェ・ラディアスは食えないヤツだが、少なくとも自らの利益がからむ時は、約束を破ったことはない。
「わかった。かけらは明日までに用意する。目的を果たせるのなら好きなようにつかってくれ」
「オーケー。これで契約成立だな。まあ適当に期待して待っててくれ」
　そう言ったイフェ・ラディアスの瞳が、一瞬、悪戯っぽく光ったことに、ネルセ・レアディは気付かなかった。

零章

下弦の遅い月が、地平線から顔をのぞかせた。
月光は淡い。
しかしその淡い月光は、ふたりの姿を追跡者へと示した。
追跡者の長は狡猾な笑いを浮かべると、部下に合図を送り、巧妙に退路をふさがせる。
そして自分は、ゆっくりとふたりの方へと向かった。
「姫君……ここまでですな。あなたは裁きを受けねばなりません。その邪悪な闇の使徒とともに、偉大なる光神へ、その汚れた魂を捧げなさい。さすれば、あなたの罪は浄化され、再び光のもとへと還ることができます。姫君……神は慈悲深い。あなたのように汚れきった存在でさえ救ってくださるのです。さあ、その邪悪な闇の使徒を神へと差し出しなさい」
「この子は……ルアークは私の息子です。そしてあの方の……私を救ってくれたあのひとの息子です。この子は渡しません。たとえ魂が滅びても、私はこの子を護ります」
姫と呼ばれた、まだ年若い美しい女性が、決然と言い放ち、我が身を盾にして息子をかばう。
「どうやら完全に魔に魅入られてしまっているようですね。自ら神のもとへ赴く気がないのなら、私が送ってさしあげましょう。さあ姫君。浄化の光に導かれ、神のもとへと旅立ちなさい！」
追跡者の長はそう言って、手に持っていた宝玉を掲げた。
その一瞬後、宝玉は目が眩むほどの閃光と化し、光の奔流となって母子を襲う。
「くっ……」
浄化の光などではない。破壊と殺戮の光がふたりを包みこもうとした瞬間、辛うじて間に合った防御結界が、何とか光を押しとどめる。

「ほほぅ……さすがはかつて、巫女王の後継最有力候補だっただけのことはありますね。しかし、これではどうですかな？　……そぅれ」

そう言うと男は、輝く宝玉を虚空へ放り投げた。

宙に浮かんだ宝玉から、さらに光がほとばしり、ふたりに殺到する。

だめ……このままでは……。

結界は、もういくらも持ちそうにない。覚悟を決めるときが来たようだ。

何としても……この子だけは、助ける！

彼女は心を決めると結界を解除し、自ら光の奔流へと身を投げた。

全身を光に焦かれながら、その光の魔力を取り込み、息子へと集中させる。

「母上！」

息子の悲痛な叫びを耳にしながら、彼女は転移の呪法を完結させた。

生きて……ルアーク。

「ははうえー！」

ルアークの絶叫が響き、彼がいずこへかと消えた瞬間、光がすべてを舐め尽くす。

そして……虚無があたりを支配した。

一章

何かに操られながら、フィルデラは進んだ。
封邪の間。
その凝縮された力はどのような存在でも捕らえ、自由を奪うことが出来る。
フィルデラは無意識のうちに扉を開くと、その恐るべき牢獄に捕らえられた哀れな生物と対した。
「私を呼んだのはあなたなの？」
本来はこの程度の力に縛られる彼女ではない。
操られるように行動しながらも、フィルデラは自らの意識を失ってはいなかった。
その導きの力が持っていた悲痛な願いを察して、自ら操られたのだ。
導きの力の主……暗黒竜もそれを理解したのだろう。フィルデラの質問に肯定とともに感謝の意志を含ませて答えた。
「何がお望みなの？　……逃がしてあげることはできないけれど、それ以外で私にできることなら、かなえてあげられるかもしれないわ」
フィルデラは慎重に言葉を紡いだ。
この生物は邪悪なものだ。いや、そうであるはずだ。
しかし、この生物と実際に意識をふれあわせてみて、この生物が自分が今まで思っていたような邪悪な存在では決してないと、フィルデラは感じた。
だが、気を許すべきではない。
もしかしたら、この生物が真に邪悪な存在であるがために、フィルデラの感覚がごまかされているのかもしれないのだ。
そのフィルデラの疑心が伝わったのか、その生物は苦笑したような心理イメージを発した。

逃げるつもりはない……。逃げようとしてもそれだけの力が自分にはもう無い。
その心理イメージから、彼が――いやこの竜は女性だ――彼女が既に、肉体も精神も、ぼろぼろに傷つけられていることを理解して、フィルデラは怒りを感じた。
彼女がまだ生きていられるのは、この封邪の間の持つ、強力な呪縛のためでしかない。
この残酷な呪縛は、捕らえた生物にたいして、死による開放さえ許さないのだ。
この邪悪な生き物は浄化され、汚れなき魂へと昇華させられるために捕らえられたのではなかったのか？
少なくとも、このような残酷な責めを受けるためでは無かったはずだ。
たとえ彼女が真に邪悪な存在であったとしても、これは許されることではない。
「だれが……だれが、あなたにこんなことをしたの？」
フィルデラは知らなかった。この質問が、自らの運命を変えたことを。
黒竜は思念を返した。
おおきな、おおきな存在。光に満ちた存在。
それが私を傷つけ、魂を食らうのだと。
光り輝く、巨大なイメージ。
その存在のことをフィルデラは知っていた。
それは、神。
少なくともほんの少し以前までは、フィルデラにとってそれは偉大なる正しき神だった。
そう……ついさっきまでは。
真実が静かにフィルデラの意識の中に染み込んでいく。
彼は確かに神以外の何者でもない。
しかし、彼は本当に正しいのだろうか？

彼の無謬を信じた自分は本当に正しかったのだろうか？
光に満ちていること＝正義。
暗黒＝邪悪。
この等式は本当に成り立つのだろうか？
これまでに幾度となく感じていた疑問　。
その解答がここにあった。
フィルデラの中で、何かが音を立てて崩れていく。
信じたかった……。信じていたかった。
神の正しさを、そして、自らの正しさを。
しかし……フィルデラにとって正しかった神は、この竜にとっては邪悪な忌むべき存在なのだ。
真に正しきものなどあり得ない。
それは神においても例外ではないのだ。
真実を知った以上、フィルデラには自らをごまかすことは許されない。
もう何も知らなかったころには戻れない。
フィルデラには、神が、そして自分達が、完全な正義であると、もう信じることができなかったのだ。
心は、決まった。
「あなたに力を貸すわ……なにを私に求めているのか、教えて」
竜が小さくうなづくと、虚空に突然、こぶし大の黒い物体が現れた。
フィルデラは、胸にそれを受け止める。
この子を、お願いします……。
必死になって神から隠していたのであろう。命を削って造りあげた結界の中に、彼女は卵を隠していたのだ。
「必ず……必ず護ってあげる。だから安心して」
そう、問いかけてフィルデラは、彼女の魂には、もう返答を返す力も残っていないことに気が付いた。
「あなたの想い……必ずこの子に伝えてあげるわ」

あふれ出る涙をぬぐおうともせず、フィルデラは決然として、この残酷な牢獄を後にした。

※

新月の闇の中、この光の神殿には彼以外に動くものはない。
今日を選んで正解だったな……。
光神殿に仕えるものにとって、今夜は禁忌の夜。何人たりとももも出歩くことは許されない。
普段なら、潜入することなどとうてい不可能なここも、この夜だけは何とかなるかもしれない。
そう思って、あせる気持ちを抑えて時を待ったのは、正解だったようだ。
失敗は許されないからな……。
大切な……大切な、存在。
今、こうしてここに自分があるのは彼女のおかげなのだ。
母を失った自分をここまで育ててくれた彼女。
もうこれ以上、自分にとって大切な存在を失うのはごめんだった。
……見つけた
さすがに光神殿の総本山だけあって、その結界の堅固さは並みたいていではなく、これまでは彼女の気配をつかむことさえできなかった。
だが、やっとそれが見つかった。ルアークは安堵に小さくため息をついた。
いや……まだ本番はこれからだ。
ルアークは緩んだ気を引き締め、広い神殿の中を、気配を消しながら慎重に進んだ。
ここを……左。
術で探るが何もいないようだ。
よし……。

ところが、そこを左折すると、突然目の前に人影が現れたのである。
しまった……待ち伏せか！
恐慌に陥りそうになる自分の心を叱咤し、目の前の人影を見極める。
金色の髪、同じく、金色の瞳。
闇のなかにあっても輝くような美しい少女が、驚きに目をみはってこちらを見ている。
まずい……！
ルアークは、今にも悲鳴をあげそうな彼女の口をすばやくふさぐと、耳元に小さくささやいた。
「叫ぶな……騒ぎになったら、そちらもやばいんじゃないのか？」
今夜は禁忌の夜。
巫女であるらしいこの少女が出歩くことは、絶対許されないはずなのだ。
その予想は当たった。
恐慌に陥りかけたらしい少女は、すぐに冷静さを取り戻し、小さくうなずいたのだ。
「あなたは誰？　……ここには、何しに来たのですか？」
たずねる少女の首筋に、ルアークは短剣を突きつける。
「おまえにたずねる権利はない……。こちらの言うことに従ってもらおう」
ルアークが、できるだけ冷たい口調でそう言うが、少女はひるまない。
「もしかして……あなたは、盗賊さん……ですか？」
いちいち盗賊まで“さん”付けで呼ぶところが、この少女の育ちの良さを示しているのだろうか？
「ああ……似たようなものだな」
毒気を抜かれて憮然とした表情で答えたルアークに、少女はにっこりと微笑みかける。

「あの……それでしたらお仕事のついでに、私をここから連れ出してはもらえないでしょうか？　あっ、もちろんその代わりにお仕事を手伝わせていただきます。私、宝物の管理係をしてたことがありましたから、宝物庫なら御案内できます」
可愛い顔をしてるのに可哀想に……。ちょっと頭が弱いのだろうか？
まあ、せっかく手伝ってくれるって言うのだから、せいぜい利用させてもらおう。
ルアークは一抹の不安を感じながらも、うなずいて、少女に肯定の意を示した。
「よかった……ここを出ることに決めたものの、どうやって結界を抜けようか、途方にくれてた所だったんです。盗賊さん……よろしくお願いします」
そう言って、嬉しそうに微笑む相手に、短剣を突きつけてるのが馬鹿らしくなって、ルアークはそれをふところにしまった。
「こちらです……ついて来てください」
少女は、ルアークの肩を引っ張って、宝物庫の方に案内しようとする。
「いや……俺の目的は宝物じゃないんだ……。きみは、このあいだ捕まった黒竜が、どこに捕えられているか知らないか？」
ルアークのその質問に、少女は驚いて目を見張った。

※

このひと……いったい？
いきなり目の前に彼が現れた時は、自分が神殿を抜けだそうとしているのが、ばれたのかと思った。
だがよく見てみれば、現れた青年の髪は黒っぽい茶色、瞳は黒で、光の要素がほとんどなく、神官ではありえない。
次に、盗賊……だと思った。

だがこの青年――いや、よく見れば年は自分とそんなに違わなく、青年と呼ぶには若すぎる、かといって少年と呼ぶには大人びている――は、宝物が目的ではないと述べ、さらには、あの、黒竜のことをたずねてきたのだ。

できるだけ感情を表すまいと抑えた表情に、必死の想いがにじみでている。

このひと！　あの黒竜さんを、助けに来たんだわ！

「あなたは……彼女のお知り合いなんですか？」

フィルデラの質問に、青年は思わず声をあげる。

「教えてくれ！　彼女は……エメラークは無事なのか？　そして、どこに居るんだ……。教えてくれ！」

この青年にとってあの竜は、本当に大切な存在なのだ。

彼の純粋な想いにうたれて、フィルデラは力なくうつむいた。

「あの方は、エメラークさんっておっしゃるんですね……。いま、彼女は封邪の間という場所にとらわれています」

「そうか……良かった、無事だったんだ……」

フィルデラの言葉に、青年は安堵の表情を浮かべた。

その嬉しそうな表情が、フィルデラの心をさらに暗くする。

どうすればいいのだろう……。

確かに、まだあの暗黒竜は生きている。だが、彼女を救うことはもう不可能だ。できるものならば、フィルデラが自分でやっている。

その事実は、彼を打ちのめすだろう……。

だが、告げなくてはならない。フィルデラは悲痛な表情で、言葉を紡いだ。

「ですけど……彼女を救うのは不可能です。もう、彼女には逃げるのに耐えうる体力も、精神力もありません。肉体も魂も、神によってぼろぼろにされてしまってるんです。あんな……あんなひどいことって……」

思い出すだけで目頭が熱くなる……。あんな状態になっても、彼女は全てをかけて、卵を護ったのだ。

「まさか……。うそだよな……？」
青年の問いに、フィルデラはかぶりを振った。
「そんな……」
青年はがっくりと肩を落とし、力なく床に膝をついた。
握った拳を床に打ちつけ、きっとフィルデラを睨み付ける。
「エメラークがいったい何をしたって言うんだ！　邪悪な暗黒竜？　よくもそんなことが言える！　きさまらが彼女の何を知っているというんだ！　光に満ちていれば何をしても正しいというのか？　闇に属するものはみな、邪悪で、浄化されなければならないのか？　平和に暮らしていた彼女を狩りたてて捕らえ、いたぶるのが正義の行いなのか？」
彼の怒りは正当だ……。
血を吐くような青年の言葉が、フィルデラの心を切り刻んだ。
「エメラークの所へ案内しろ！　封邪の間はどこにあるんだ！」
青年がフィルデラの襟首をつかみ、揺さぶりながら問い詰める。
「それはできません！」
ぱしんっ……。
言い返したフィルデラを、青年の平手がおそった。
だが、フィルデラはひるまずにさらに言葉を継ぐ。
「今から封邪の間にいけば、神に知られないわけにはいきません……。これを見てください」
フィルデラは必死の表情でそう言うと、背負い袋をおろし、そのなかにあるもの……闇色の卵……を、青年に示した。
「こ……これは……」
「そうです……この子を護るために、エメラークさんは、すべてをかけたんです……。私はこの子を彼女に託されました。私には、この子を安全に逃がす義務があります。たとえあなたにでも、この子を危険にさらすまねはさせません！」
「そう……か。そうだったのか……。エメラークも……」
その闇色の卵は、青年の怒気をうすれさせ、冷静な表情をとり戻

させた。
だが、その感情を抑えた表情のなかには、薄っぺらい表面的な怒りではなく、蒼く冷たい光を発しながら、その実、赤い炎の何倍もの熱を持つ紫炎のような、真実の怒りが存在するのをフィルデラは感じていた。
どんな経験が、人にこれだけの怒りをもたらすのだろう？
このひとに、これだけの怒りを抱かせるほどの仕打ちをしたのは、自分がこれまで信じてきた神なのだ。
私、本当になにも知らなかったんだわ……。
そんな神に盲従してきたこれまでの自分を、フィルデラは心から恥じていた。
「危険をおかしてこいつを護ってくれたのに、殴ったりしてすまなかったな。女に暴力をふるうなんて最低だ……。エメラークに怒られちまう。とにかく、卵は預かろう。きみは巫女なんだろう？　見つからないうちに、自分の部屋へ戻るといい」
自嘲してつぶやく青年に、フィルデラはかぶりを振る。
「いいえ……あなたの怒りは当然です。私は……私達はそれほど、ひどいことをしてきたんですから。知らなかった、気付かなかったで済まされることではないんです……。神は間違っています！　ですから、私は戻りません。この卵を托された以上、さっきも言ったように、私はこの子にたいして義務があるんです。私もあなたと同行します」
そう言ってフィルデラは、青年を真剣な表情で見つめた。
「本気……なのか？　俺はおまえの信じる神に、敵対する組織に属しているんだぞ？」
念を押す青年に、フィルデラは迷うことなくうなずく。
「はい。あなたは、私が以前信じていた神の敵です」
フィルデラはそう言って、にっこりと微笑む。
しかし、ルアークは、その笑顔の中に固い決意が秘められているのを知った。

「わかった……俺の名前はルアークという。よろしくな」
「私は、フィルデラと申します……よろしくお願いします……」
運命が……動き始めた。

※

わからない、娘だな……。
自分よりも真剣に宝物をあさるフィルデラを見て、ルアークは頭を抱えた。
「ルアークさん見てください……。この大きな紅玉を。これなら、高く売れますよね……。ひい、ふう、みい……七つありますから、ひとつくらい持って行っても、ばれません。どうぞ……」
「あっ、ああ……」
うずらの卵ほどの大きさの紅玉を受け取って、ルアークは力なく返事を返す。
あのあとすぐに脱出しようとしたルアークを、『ついでですから』と宝物庫に誘ったのはフィルデラの方なのだ。
しかも、『足がつくような品は困りますよね』などとおっしゃって、手際よく、持ち出す宝物の選別を始めたりなんかしたのだ。
こいつこそ、本物の盗賊なんじゃないだろうな？
ルアークは、小さな巾着袋を取り出すと、フィルデラが選別した宝石を、その中に入れた。
「あれ……ルアークさん、もしかしてその袋は？」
「そう、『狭間の袋』さ」
『狭間』と呼ばれる世界の隙間とつながるこの袋は、みかけの何倍もの容量をもっている。ルアークが取り出したその狭間の袋は、人ひとりくらいならなんとか収納できるくらいの容量を持っていた。
「もう……そんな便利な物があるなら早くおっしゃってくだればいいのに……。それがあるなら、持ち運びの利便のために、かさの少ない宝石だけを選ぶ必要はありませんから……。貸してください」

そう言って袋をひったくると、今度は食器棚の方にむかう。
銀や金、そして玻璃でできた高価そうな食器が、呆れるほどたくさん並んでいる。
フィルデラは、一種類の食器について数枚づつ、狭間の袋の中にしまいこんでいった。
「これぐらいでよろしいでしょうか？　ルアークさん……」
よろしいでしょうかも何も、一生、いや、十生は遊んで暮らせそうなほどの宝物が、すでに袋の中にはしまいこまれている。
「いいんじゃないかい……。しかし、おまえ、宝物庫の管理係をしてたって言ってたが、本当は宝物の横流しでもしてたんじゃないだろうな？」
ルアークがそう言うと、フィルデラは首を振った。
「いいえ……業務の一環として、宝物の売却を行っていたんです。私も、最初は知らなかったんですけど、ある時、宝物の一部が減っていることに気がついて、テレシアさん――えっと、管理長をなさっている女神官です――にたずねたら、極秘のうちに必要な資金をそろえるために、裏のルートで売却する必要があったんだって教えられて……。それから私も、テレシアさんのお仕事を手伝うようになったんです」
あの～、それを横流しって言うんじゃないのでしょうか？
どう考えても、テレシアという人物に騙されていたとしか思えない。
しかし、あくまで真剣らしいフィルデラに、そのことを指摘するのは可哀想で、ルアークは頭を抱えながらも黙っていた。
本当に、おかしな娘だ……。
巫女らしく、純真な性格をしているのだが、その割には視野の狭さが無い。
世間知らずかと思えば、裏のルートでの取り引きなんていう、とんでもない知識を身につけていたりするし……。
なによりも、選ばれた者だという特権意識がないのだ。

これまでに出会った、貴族や神殿の特権階級達は、必ずその特権意識が腐臭を漂わせていた。
巫女などの中には、下層階級に優しく接する者もあったが。それはあくまで、その特権意識に根差した、偽善的なお情けでしかなかった。
そして、ほとんどの者は、その偽善的なお情けでさえ、持ち合わせていないのだ。
それに比べて、この少女はどうだろう？
特権意識に凝り固まることなく、物事を客観的に判断する、たぐいまれな能力を持っているのではないだろうか？
間違っていると思えば、今まで信じていた神をも批判し、横流し以外の何物でもない行為を、業務だと説明されてあっさり納得し、盗賊だと思った相手に、自分の身柄をまかせようとし……いや……やっぱりただのアホかも知れない……。
「ルアークさん、どうされました？　なんだか、おかげんがよろしくないようですけど……」
心底、心配そうな表情で自分を見るフィルデラに、ルアークの疲労は倍化した。
「いや……なんでもない……。とにかく、ここを脱出しよう……」
「はい」
出会ったばかりの自分を、信じきった瞳で見つめながら返答するフィルデラに、ルアークは深々とため息をついた。幕間
「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関ってたんだ……」
神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。
幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。
「ルアークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があったんだ。“かけら”を送り込む以外に、

こんな手段が……」
独り言を言うのがくせなのだろうか？　幻像を眺めながらぶつぶつ言う彼女は、ちょっと危なくみえる……。
「やっぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアークくんは私達と違って、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立っているんだわ」
今回の件に、妹――いや弟というべきか？　――のレアディが関わっていたことは知っていた。
これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行ったものを除けば、それはすべて、レアディの波長を伴っていたからだ。
その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかった。
そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。
「さぁてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘ったら、私が目をつけてた宝石、全部持ってっちゃって……」
テレシアと呼ばれるその女性は、そう言ってにっこりと微笑んだ。

～幕間～

「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関ってたんだ……」

神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。

幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。

「ルアークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があったんだ。“かけら”を送り込む以外に、こんな手段が……」

独り言を言うのがくせなのだろうか？　幻像を眺めながらぶつぶつ言う彼女は、ちょっと危なくみえる……。

「やっぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアークくんは私達と違って、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立っているんだわ」

今回の件に、妹――いや弟というべきか？　――のレアディが関わっていたことは知っていた。

これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行ったものを除けば、それはすべて、レアディの波長を伴っていたからだ。

その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかった。

そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。

「さぁてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘ったら、私が目をつけてた宝石、全部持ってっちゃって……」

テレシアと呼ばれるその女性は、そう言ってにっこりと微笑んだ。

二章

「早く……出たいなぁ……」
暗くて、寒くて……。広いんだか狭いんだか良くわからない、その妖しげな空間の中で、フィルデラは心細げにつぶやいた。
ここに入ってから、もう何時間もたったような気がする一方、ほんの数分間しかたってないような気もする。
時間の感覚がおかしくなってる。
もしかしたら、この空間では外とは時のたち方が違うのだろうか？
外での数分が、ここでは何十年にもなったりして……。
冗談でそう思ったのだが、その考えはフィルデラの心をさらにおびえさせた。
結界を安全に越えるために、狭間の袋に入ってもらえないか？
そうルアークに言われて、入ってみたのはいいが……。
「いやだ、もう……早く出たい！」
そう叫んだ瞬間、突然、胸と背中に手が押しあてられた。
「きゃう！」
ぐい……。
その手は無造作にフィルデラの身体をつかみ、“外”へと釣り上げる。
“外”に出たフィルデラは、突然、地面の角度が変わったせいで倒れそうになり、広い胸に抱きとめられた。
少年――この時のルアークの表情は子供っぽくて、少年と呼ぶにふさわしいものだった――は、フィルデラをしっかりと抱きとめながらも、偶然の起こした事態に思わず照れてうつむいた。
しかし、まだ両手は、フィルデラの身体――その胸と背中にしっかり添えられている。
ルアークに触れられている部分が、炎にあぶられるように熱い。
「ルアークさん……。手を、手を離してください……」

フィルデラの言葉に、半ば放心状態におちいっていたルアークは、やっと自分を取り戻し、あわててフィルデラの身体を離した。
「ご……ごめん」
「いいえ……」
フィルデラの胸は早鐘をうち、全身が火が出るように熱い。
それは、これまでウワサにしか聞いたことのなかった、恋の症状に酷似していて……。
まだ、出会ったばかりなのに……。
そう考えれば、今度は“一目惚れ”、という単語が頭に浮かんで来る。
ルアークはルアークで、何を思っているのか、真っ赤になってうつむいたきり、ひと言も話さないし……。
ふたりを気まずい沈黙がおそった。
テレシアが見ていれば、『もう……ふたりとも、可愛いんだから♪』っと思いっきり喜びそうな雰囲気である。
だが、当事者たる初心なふたりにとっては、冗談ではない。
互いに“異性”を意識してしまって、彼らとしては、照れてうつむくしか対処の方法がなかった。
とにかく！　今はこんな恋愛ごっこをしているヒマはないのだ。
何とか心を落ち着かせて、話し掛けようとするが……。
「あの……」
「えーと……」
言葉をかけようとするタイミングさえばっちり合ってしまって、また、ふたりとも照れてうつむいてしまった。
そうやって『ふたりの世界』にひたっていた彼らを、現実に引き戻したのは獣の気配だった。
ルアークの顔がぱっと引き締まり、冷静な、大人びた表情に変化する。
そして、すばやい動きでフィルデラを後ろにかばうと、殺気を発する獣に対した。

「光獣だな。行きには見掛けなかったから油断していたが、やはりこいつらには禁忌は関係なかったか……」
光獣とは、種を問わず、光の要素を多く持った獣のことを指す。
そして、巫女である自分達と同じく、神に選ばれた聖なる存在であると、フィルデラは教えられてきた。
しかし、フィルデラにも解るその気配は、歪み、狂気さえはらんだ禍々しいものであった。
ひい、ふう、みい。
三つの気配がふたりを伺っている。
それらは、うなり声も、吠え声もたてない。
この獣達には、侵入者を始末するために特殊な訓練がなされているのだ。
フィルデラをかばうルアークには、隙が無い。
獣達も、攻めあぐねているのか、まだおそってはこない。
緊張が臨界点に達した瞬間。ルアークがふっと気をぬいた。
引き絞られた矢が放たれるように、光獣がルアークに向かう。
「ルアークさん！」
その“三本の光の矢”に、ルアークが貫かれたような錯覚を感じて、フィルデラは思わず声をあげた。
だが、倒れたのはルアークではなく、三頭の光獣達だった。
勝負は一瞬。
一頭は短剣で眉間を突かれ、もう一頭は同じく短剣でのどをかき切られ、そして、ルアークに達するかに見えた最後の一頭は、彼が造り出した魔法の障壁に跳ね返されて、地面に転がっている。
にやり……。
さっきフィルデラの前で、照れてうつむいていたのと同一人物とは思えない、凄惨な笑みを浮かべ、ルアークはまだ息のある最後の一頭に歩み寄る。
くぅ～ん。
その光獣……どうやら犬だったようだ……は、もうすでに戦意を

失い、哀れな鳴き声をたてている。
「やめて！」
殺しては……だめ！
しかし、その獣をかばおうと飛び出したフィルデラは、ルアークに力一杯突き飛ばされた。
「きゃうっ」
したたかに腰を打ち付け、フィルデラは思わず悲鳴をあげる。
「ルアークさん……あなたは！」
突然、理解できない行動をとった相手を非難しようとしたフィルデラは、実は間違っていたのは自分であったことに気がついた。
光獣は戦意を失ってなどいなかったのだ。
ルアークに突き飛ばされなければ、フィルデラは光獣に引き裂かれ、命を失っていただろう。
「芝居をうつとは、獣の分際で味なまねをしてくれる……」
そうひとりごち、ルアークは、倒れたフィルデラをかばうように、光獣と対峙した。
重苦しい沈黙。
やがてそれにじれた光獣が、ルアークに飛び掛かった。
だが、対するルアークには先程のような、技の切れが無い。
くり出した短剣は、やすやすと獣にかわされてしまい、辛うじて間に合った魔法の障壁で、獣の攻撃を防ぐ。
「くっ……」
その様子を見て取って、獣はここぞとばかりに、ルアークに連続攻撃をしかける。
反撃もできずに防御に徹したルアークが、少しづつ追い詰められていく。
ルアークさん！　どうしたの？
「あっ……」
フィルデラは気付いた。ルアークは傷を負っているのだ。
肩口からななめにえぐられた、深い傷。

その傷のために、ルアークは本来の力を発することができないのだ。
あの時……自分をかばって突き飛ばした時。
彼は自分の代わりに傷を負ったのだ。
フィルデラは自らの愚かさを悔いた。
そして、ルアークを傷つけ、追い詰めている獣に対して、これまで感じたことのない、怒りに似た、昏い感情を抱いた。
これは……なに？
それは、憎しみ。
そう呼ばれる感情であることを、フィルデラは知らなかった。
「うっ……」
獣の鋭い攻撃を腕に受け、ルアークが短剣を取り落とした。
武器を失ったルアークに止めを刺さんと、獣が跳躍する。
「だめえぇっ！」
その極限の状況に、フィルデラの中で感情が暴走し、『力』となってほとばしった。

※

ここで、死ぬのか？
間近に獣の姿をした死が、迫っている。
『力』さえまともに使えれば……。
結界は抜けたといっても、ここはまだ光神殿の敷地内である。
闇の恩寵深いルアークの『力』は、ほとんど封じられてしまっている。
だが、ただ死ぬわけにはいかない。
自分が死ねば、次はあの少女が、この獣に引き裂かれるだろう。
せめて……相討ちに……。
使えるかぎりの『力』を集めて、闇の刃を造りあげる。
ふふっ……。

今、意識のほとんどを占めるのは、エメラークでも、母でもなく、出会ったばかりのあの少女だった。
惹かれて……いる？
自分とは対称的な存在。
光の恩寵深い、美しい少女に。
自分は、惹かれているのだ。
もっと知りたかった。
彼女のことを……。
だが、その願いがかなえられることはない。
もう終わりなのだ……。
全てをあきらめた瞬間。
まばゆい白光が、獣を襲った。
圧倒的な光の力。
しかし、自らとは相反するはずのその力に、ルアークは不思議な暖かさを感じた。

※

「ルアークさん！」
ほとばしった『力』が『光』と化し、いままさに、ルアークを引き裂かんとしていた光獣に注がれた。
その光は、破壊のためのもの。
光獣が溶けていく。
どろどろと歪みながら、光獣が溶けていった。
どさり……。
醜く歪んだ光獣の死体が、地に横たわる。
「私……わたし……？」
自分が殺したのだ。
「あっ……ああ……」
自分自身が怖かった。

あの時、確かにフィルデラは光獣の死を願った。
昏い、これまで感じたことの無いような感情に突き動かされて、『力』を破壊の光に変え、光獣を殺したのだ。
フィルデラは呆然と、その場にへたりこんだ。
「フィルデラ……危ない所を済まなかった……。おかげで助かったよ」
ルアークに声をかけられても、フィルデラは返事を返すことができなかった。
普通ではないフィルデラの様子に、ルアークは驚いて駆け寄る。
「フィルデラ！！　しっかりしろ」
ぱしっ……。
軽くほほを叩くと、やっと瞳の焦点があう。
「ルアークさん。私は……わたしは……」
その瞳に浮かぶのは罪の意識。
彼女は、自分自身におびえているのだ。
「フィルデラ……何におびえている？」
ルアークは、わざと、突き放すようにそう言った。
「私は……なぜ、あんなことを……。私は……」
うわごとのようにつぶやくフィルデラを、ルアークは皮肉げに嘲ける。
「なるほど……俺を助けたことを後悔してるってわけだ……」
「違います！　どうして、そんな！」
「そうじゃないか。おまえが“あんなこと”をしなければ俺はあの獣に殺されていたんだぞ。光獣を殺すか、俺を見殺しにするか、あの場面では二者択一だ。そして今、おまえは光獣を殺したことを後悔している。ということは、俺を助けたことを後悔していると、そう言うことになるんじゃないか？」
「それは……」
詭弁だ。そう言い返そうとしてフィルデラはできなかった。
ルアークの言葉は、ある意味においては正しかったからだ。

だが、やはりそれは詭弁だ。
生き物を殺すのは絶対に許されないことだ。
たとえそれ以外に方法がなかったとしても、そのことを正当化してはならない。
それは、絶対に正しいことだ。
フィルデラは、その、絶対に正しいはずの自分の感情を、曲解されたことに怒りさえ覚えて、ルアークに反論しようとする。
この時、フィルデラに少しでも冷静さがあれば、ルアークのその冷たい言葉の裏に、フィルデラの心が危険な自己嫌悪の罠にはまるのを防ごうという意図があったことに気付いただろう。
だが、そのようなルアークの配慮を必要とするほどの今の彼女の心に、そんな余裕があるはずもなく、怒りに流され言葉を紡いだ。
「それは違います！　たとえそれしか方法がなかったとしても、命を奪うのは絶対に許されないことです。あなたのように、そのことを当然だなんて思うのは間違っています！　光獣を屠ろうとした時、あなたがどんな表情をしていたかご存知ですか？　まるで命を奪うことを楽しんでいるかのような、そんな表情でした……あなたは……」
それ以上、フィルデラは言葉を続けることができなかった。
冷たい……つめたい……感情をなくしたルアークの発する冷気に、さえぎられたのだ。
「そう……か。俺は、そんな表情をしていたか……。おまえは、そう感じたのか」
おまえも……おなじか……。
自嘲の笑みを浮かべたルアークの、その苦々しいつぶやきに、感情に流されていたフィルデラは、急速に冷静さを取り戻しつつあった。
怒りから立ち返ったフィルデラに、乾いた笑いを浮かべて、ルアークが質問する。
「フィルデラ。おまえは食事をしたことがあるか？」

唐突なルアークの質問に、フィルデラは戸惑いの表情を浮かべて、口を開いた。
「それは……食事をしなければ、生きていけませんから」
フィルデラの返答に、ルアークは馬鹿にしたような表情を作って、言葉を継ぐ。
「それは大変だな。おまえは毎日食事をするたびに、殺された動植物のために、今のように後悔しているのだろうからな。なにしろ、自ら手を下してさえ、これだけ自分を責めているんだ。自らは手を汚さず、罪を他人に委ねている食事のときの悔恨は、想像を絶するものなんだろうな」
「あ……」
単純な、本当に単純な事実。
自分が今、ここにこうして生きているということが、他者の犠牲のうえにあるという事実。
そのことに、フィルデラはまったく気付いていなかった。
ルアークを助けるために、あの光獣の命を奪ったこと。
そして、自らが生き続けるための糧として、動植物の命を奪うこと。
この両者にどんな違いがあるというのだろうか？
いや、ルアークの言うとおり、自ら手を下していないぶん、食事をとるときの罪のほうが重いくらいだ。
自分も、あの、神とおなじだ……
絶対的に正しいことなどありえない。ただひとつ、それ自身をのぞいて。
それなのに自分は、自分の中だけでしか通用しない『正しさ』を振りかざし、ルアークを傷つけたのだ。
「ルアークさん……」
呼び掛ける……が、何の反応もない。
フィルデラを完全に無視して、ルアークは倒した光獣の方に向かおうとする。

「うっ……」
肩の傷がいたむのか、一瞬顔をしかめたルアークに、フィルデラは思わず縋りつく。
「ルアークさん！」
拒絶される……と思った、せめてそうして欲しかった。
だがルアークは、何の感情も表情に宿さず、フィルデラに顔を向けさえしなかった。
フィルデラは、くじけそうになる心を叱咤して魔法を発動し、彼の傷を癒す。
しかしルアークは、何事もなかったかのようにフィルデラを無視し、静かに立ち上がった。
そして、取り落とした短剣を拾い、傍らに転がっている、フィルデラの発した光線に灼かれて醜く歪んだ光獣の死体を、短剣で突いた。
いったい何を！
後を追いかけてフィルデラは、その行為の理由を知った。
その獣は、まだ死に切れずに苦しんでいたのだ。
……ありがとう……。
ルアークに感謝を捧げ、魂が去っていく。
その魂に奇妙な歪みを感じて、フィルデラは思わず問いかけていた。
「この歪みは……なに？」
去りかけていた魂が、フィルデラに思念を返す。
大きな、おおきな光に満ちた存在。
光獣の、その存在に対する凄まじい怒りの波動が、フィルデラをおそう。
それが……それが、あなたを歪めたの？
肯定……予想どおりの肯定。
そして光獣は、フィルデラにも感謝の念を返した。
それを言葉に直せば以下のように訳することができる。

あなたの光は暖かかった……開放してくれてありがとう……と。
自らを傷つけたフィルデラに対して、感謝の念を返したのだ。
消えゆく魂を見送るフィルデラの中に、神に対する新たな怒りがわきあがる。
こんな……こんなことって！
破壊の光を暖かく感じるほどの苦しみ。
それはいったい、どのようなものなのだろう？
怒りは臨界点を越え、昏い何かを伴って、ある感情へと進化した。
これは……この感情は……。
それは、さっき光獣に対して抱いた、負の感情と同じものだった。
それは、憎しみ。
いまフィルデラは、初めてその感情の意味を理解した。
神が憎かった。
このようなむごい行いを見せ付けられて、そう思わずにはいられなかった。
フィルデラは気付いた。
あの時、ルアークの凄惨な表情の裏に、存在していた感情に。
ルアークさんも……憎んだんだわ。
いえ……ずっと、憎み続けて来たんだわ……。
これは負の感情。
昏い感情。
だが、これは人としてあるために、必要なものだ。
否定することはできない。
そのことにいま、フィルデラは気付いた。
「ルアークさん……」
呼び掛ける……が、荷物をまとめるルアークに反応はない。
しかし、フィルデラは構わず、言葉を続けた。
「ルアークさん、すいませんでした。私……浅薄でした。あなたに、軽蔑されても仕方ないと思います。ですけど……あなたと同様に、私も神を許すことができません。そして、そんな神に仕えていた、

自分自身を許すことができないんです。ルアークさん、お願いです。私にその罪をつぐなう機会を与えてください。そして、今、重ねたばかりの、あなたに対する罪に対しても……。お願いします」
反応は期待していなかった。
だが、ルアークは振り向いた。
相変わらず無表情だが、とにかく振り向いてはくれたのだ。
「こいつを托されたのはおまえだろう？　それなら、最後まで責任はもて」
ぶっきらぼうにそう言って、竜の卵の入った背負い袋を、ルアークはフィルデラに返した。
それっきり、何も言わず無言で歩き去っていく。
フィルデラは静かに、その後を追いかけて行った。

※

既に峠を越え、東の海が見える所まで進んでいる。
水平線が、白み始めていた。
まもなく、朝が訪れる。
ルアークは、ちらりと、横目で後ろを振り返った。
一晩中歩き続けているのだ。
疲れているだろうに……彼女は何の不平も言わない。
どうして、おまえは……。
いや……どうして……俺は……。
裏切られた……と思った。
だが、裏切ったのは、自分の方だったのだ。
彼女は確かにルアークを傷つけた。
彼女に惹かれはじめていたルアークは、彼女を理想化し、無邪気に、彼女が自分の全てを受け止めてくれるものと信じていた。
その、勝手な理想を崩されて、ルアークは傷ついた。
命を奪うことを楽しんでいるような表情をしていた……と。

彼女はそう言った。
あの時、ルアークのほとんどを占めていたのは、神への怒りだった。
しかし、自分の中に、少し、ほんの少しだが、殺戮を楽しむ感情があったことに、ルアークは気付かされた。
そして、そのことをごまかすために、自分はさも正しいかのように、彼女のちょっとした間違いを責めたてたのだ。
過剰防衛……だ。
自分の言葉がどれだけの打撃を彼女に与えたか。
ルアークは気付いていた。彼女の心があげた悲鳴に。
だが、あの時の自分は、彼女の心が傷つくことに、喜びを感じてさえいたのだ。
それなのに彼女は、そんなルアークの苦し紛れの皮肉を真剣に受け止め、ひたすら自分だけを責め続けている。
俺は卑怯だ……。
そうやって、彼女が苦しんでいるのに気付いていても、自分の過ちに気付いていても、ルアークは何も知らないふりをした。
彼女の苦しみに気付きながら、ルアークは何もしなかったのだ。
そのとき、どさり……と、後ろで音がした。
振り向くと。
体力の限界に達したフィルデラが、地に横たわっていた。
卑怯なだけではない……。
本当に自分は情けない……なんと情けない男なのだろう……。
彼女が、疲れているのを知りながら、気付きながら。
歩みを緩めることもなく、フィルデラにとっては、明らかなオーバーペースで歩き続けたのだ。
「ごめんなさい……ルアークさん、ごめんなさい」
朦朧とした意識の中でひたすら謝る少女に、ルアークは水筒を差し出した。
「飲め……」

のどに水を流し込み、一息ついて、フィルデラは悲しげにうつむいた。
「すいません……。ルアークさんにご迷惑をおかけして……。足手まといになってしまって……」
「そう自覚があるのなら、せめて倒れる前に言って欲しかったな。無理をしても、結局こういうことになって、余計に足を引っ張ることになる」
おまえは何も悪くない……。悪いのは俺だ……。
そう思う心とは裏腹に、口をついて出たのは冷たい言葉だった。
紡がれた言葉は刃となって、彼女の心に突き刺さる。
「ごめんなさい……。本当に……ごめんなさい」
なにを、謝る必要があるというのだろうか？
悪いのは自分だ。
彼女にとって峠越えがきついことは、最初から解りきっていたのだ。
だから、荷物の分担とペース配分に気を付けてやれば、何の問題もなかったはずだ。
それを解っていて、ルアークはわざと彼女を無視したのだ。
本当に……どうしようもないな……俺は。
自嘲してルアークは言葉を紡いだ。
「まあ、済んでしまったことは仕方ない……。次から気をつければいい。どうせ、そろそろ休憩を取らねばならなかったんだ。食事にしよう……。立てるか？」
なにを、かっこつけているんだ？
いかにも傷ついた彼女を許してやるという風を装って、ルアークはフィルデラに手を差し出した。
そんな自分を、ルアークはさらに嫌悪した。
自分に向けられた彼女の笑みが、心に突き刺さった。
※

完全に嫌われてしまった……と思っていた。
目の前に差し出された腕が信じられない。
彼は、優しい表情で自分を見ている。
フィルデラは、ゆっくりとその腕を取った。
力強い腕に引かれて立ち上がってみると、まだ足がぐらつく。
だがルアークが、しっかりと支えてくれた。
「ルアークさん……」
それだけで、たったそれだけで、傷ついた心が癒されていくのを、フィルデラは感じていた。
岩場の陰、平らになった大きな岩の上に、ふたりは腰をおろした。
ルアークは自分の背負い袋をおろすと、塩漬け干肉と、乾麦、そして干果を取り出した。
「火は使えないから、このままで我慢して欲しい。食欲がないかもしれないが、食べなければさらに体力を失うことになる。口にあうとは思えないが我慢して食べるんだ」
フィルデラはうなずいて、沢水で洗って塩を抜いた干肉を受け取り、口に入れた。
塩辛い……が、疲れたフィルデラにはその辛さが心地好かった。
だが、固い肉をよく噛んで、飲み込もうとしたとき……。
「うっ……」
胸がねじれるような吐き気が、フィルデラを襲った。

※

「はあ……はあ……うぇっ……」
げぼ……
吐くものなどないというのに……。
自らを責めるように、フィルデラは苦い液体を絞り出し続けた。
「フィルデラ……」

これは肉体的なものではない、精神的なものだ。
フィルデラの“こころ”がふるえている。
ルアークは、昨夜自分がフィルデラに放った言葉を思い出していた。
あの言葉はフィルデラに、生きるためには必ず罪が伴うことを、気付かせてしまったのだ。
そして、繊細なフィルデラの心は、他者を犠牲にしてまで、生き続けることを望まなかったのだろう。
俺の……せいだ……。
俺が、あんなことさえ言わなければ。
彼女は、自らの罪に気付くことなく……。
いや……それではだめだ
彼女は気付かねばならなかった。
『生きていくこと』がはらむ罪に、気付かなければならなかったのだ。
ルアークは思い出した。
エメラークに拾われて、はじめて狩りをした時のことを。
はじめて、他者の命を奪った時のことを。
あの時自分は、自ら手を下し命を絶ったウサギの肉を口にして、今のフィルデラのように嘔吐した。
あの時のエメラークの怒りは忘れることができない。
逃げるな……と、彼女は言った。
罪から逃げるな……と。
それに立ち向かえ……と。
フィルデラも乗り越えなければならないのだ。
生とともにある罪を、乗り越えなければならないのだ。
「落ち着いたか？」
ルアークは、できるだけ冷たい口調を装って、フィルデラに話しかけた。
その冷たさを感じ取り、フィルデラはまつげを伏せる。

「ルアークさん……私、わたし……」
ルアークは、口ごもったフィルデラをさらに突き放し、皮肉の刃をあびせる。
「いい気なものだな。逃げればそれで許されるとでも思っているのか？　考えてみろ。すべての生命は、生きるために罪を負う。だがそれでも、生きてゆかねばならないんだ。自分の罪から目をそらすな！　おまえは気付いていないのか？　逃げることこそ、最大の罪だということに。おまえは卑怯者だ。生をうけこの世に存在する以上、おまえには生き抜く義務がある。ここでそれを放棄するなら、これまでおまえが生きるために命を絶たれたものたちに、どう言い訳するつもりだ？　もう一度言う。おまえは卑怯者だ！　おまえの罪の償いとは、逃げることなのか？」
そう言ってルアークは、うつむいたフィルデラに水筒を差し出し、口をすすがせる。
そしてもう一度、干肉を切り分けると、フィルデラに押し付けた。
「食べるんだ」
フィルデラは、決然とした表情でルアークを見返し、干肉を口に押し込んだ。
固い肉をゆっくりと咀嚼し、心を決めて飲み込む。
「うっ……」
ごくん……。
吐き気をこらえながらも、フィルデラは肉を飲み込むことに成功した。
これで……いい。フィルデラは新たな一歩を踏み出すことができたのだ。
結果的に、あくまで結果的にではあるが、ルアークのとった態度は正しかった。
自己の存在基盤を失った彼女には、中途半端な優しさではなく、厳しく接することが必要だったのだ。
彼女自身が、新たな土台を、自らの心に造りあげる必要があった

のだ。
「もう、大丈夫だな？」
そうたずねると、フィルデラはこくんと小さくうなずく。
「はい……私、自分がどれだけの罪を背負っているか、そのことに全く気付いてなかったんですね。もう逃げたりはしません。自らの罪に、そして、神の罪に、立ち向かって行きたいと思います」
そう言ってフィルデラは、澄んだ瞳に絶対的な信頼を浮かべて、ルアークを見つめた。
誤解だ……。
フィルデラは、ルアークが彼女のために厳しい態度を取ったのだと誤解しているのだ。
そうではない、違うのだ。
結果的に彼女のためになったとはいえ、ルアークは彼女を思いやって、そんな態度をとったのではない。
彼女の心の清澄さに、自分の心の汚さを認識させられて、それをごまかすために、あのような態度をとったのだ。
決して自分は、彼女にこのような視線を受けるにふさわしい人間では、あり得ないのだ。
しかし……。
そう、解っていながらも、ルアークはフィルデラを、そして自らを偽らずにはいられなかった。
怖かった。
彼女に自分のちっぽけな本性を悟られるのが、本当に怖かったのだ。
だから、ルアークは演技した。
いかにも、すべて解っていたというような笑みを浮かべて、彼女に微笑みかける自分が、心底から情けなかった。

～幕間～

「やっほー。ラディアス君、元気してた？」
相手の迷惑そうな表情に全く気付きもせずに、テレシアは、いや、光主女神リ・セルテ・リ・エシアは、脳天気に呼び掛けた。
イフェ・ラディアスはため息を付くと、あきらめて返答する。
「リ・セルテレシア。何か御用ですか？」
ふたつ目の敬冠詞『リ』の後に母音が来ているので、『リ・セルテ・リ・エシア』は『リ・セルテレシア』と発音される。
リ・セルテレシアは、その、迷惑だ、というニュアンスを言外に含ませた言葉に、にっこりと笑いながら答える。
「いいえ、そちらのほうこそ、私に何か用があるんじゃないのかなぁって思ったから、わざわざ出向いてあげたんだけど、違ったかしらん？」
違う違う！　大違いだ。そう言いかけた時、リ・セルテレシアが小声で付け加えた内容に、イフェ・ラディアスは仰天した。
ルアークくんのことなんだけどなぁ……。まあ、私はいいんだけどね。あのアホにこのことがばれたって。
そうおっしゃって、にっこりと微笑む相手に、イフェ・ラディアスは頭を抱えた。
「あなたのおっしゃる通りです。私のほうから伺うのが礼儀なのに、わざわざ来ていただいてすみません。どうぞおあがり下さい」
「それじゃぁ、お邪魔するわ」
そう言いながら、もうすでに、ずかずかと応接室に向かっている彼女の後ろ姿を見おくるイフェ・ラディアスの拳が、ぷるぷると小刻みに震えていた。

※

「うんうん。やっぱり、ラディアス君のいれたお茶は美味しいわ……」
ズズズズ……。
「お代わりお願い」
四杯目である。
イフェ・ラディアスは差し出された湯飲みにお茶をつぐと、乱暴にリ・セルテレシアの前に置いた。
どんっ。
「ありがと……」
ズズズズ……。
「ぷはぁ……本当に美味しいわ、このお茶。同じ茶葉のはずなのにどうして私のいれたのと、こうまで違うのかしら……」
その言葉に、彼女がいれた破壊的なお茶の味を思い出し、吐き気が込み上げる。
どうやったら、あんなに不味くお茶をいれられるのか、こちらが聞きたいくらいである。
思わずげんなりしてしまう心を叱咤して、少しでも状況を改善すべく、イフェ・ラディアスは言葉を紡いだ。
「リ・セルテレシア、ひとつお聞きしたい。あなたの立場からして、たとえ傍観者としてでも、この件に関るのは得策ではないと思うのだが、どうでしょうか？」
正論である。
だがその正論も、彼女には何の感銘も与えなかったようだ。
「そんなことぐらい解ってるわよ。だけど、こんなおもしろそうなこと見逃すなんて、私、嫌よ。あなたが見せてくれないなら、私、自分で勝手に動くけど、それでも良いの？」
良くない。
そうなったらお終いである。
ため息をつきながらイフェ・ラディアスは、無条件降伏を決意した。

「解りました。あなたのおっしゃる通りにします。その代わり、あの世界にある、あなたの『かけら』はできるだけ早く引きあげてください。あなたの力は大きすぎる。ただでさえバランスが崩れかけているあの世界にとって、あれは邪魔でしかないんですから」
「解ったわ……」
本当に解ってるんだか、どうだか……。すべての神を統べる地位にある彼女の顔を、イフェ・ラディアスは疲れ果てた表情で見つめた。

三章

「あれが“俗都デルシス”だ」
迂回するために通った険しい峠道が開け、遠くに都の街並みを一望することができた。
デルシス。
半島の先端に位置するこの街は、尖った岬を中心にして、東西ふたつに分かれている。
西に位置するのが、光に選ばれた聖なる者達、貴族や神官が住む“聖都デルシス”。
そして、その向かい側、半島の東には、様々な民が集い住む、世界の商業の中心“俗都デルシス”が広がっていた。
フィルデラが居た神殿は、“聖都デルシス”を一望できる高台の上にあった。
整然と整った、しかし、どこか冷たい雰囲気を持つ“聖都デルシス”の見慣れた街並みとは対象的に、この“俗都デルシス”は、雑然としながらも、何か得体の知れない熱気というか、生命力を放っているようだ。
「何だか、すごい街ですね……」
すごい街……言い得て妙である。
“俗都デルシス”という街は、とにかく“凄い街”なのである。

※

「うっ……」
“俗都デルシス”の凄さその一、“凄い臭い”にあてられて、フィルデラは今にもはきそうな表情で、街道そばの木陰にへたりこんでしまった。
まだ街まではある程度距離があるのだが、風に運ばれ、すでにも

うかなり臭う。
だがまだまだこれでも序の口だ。
ここで鼻が慣れるまで、少し待った方がいいだろう。
「少し、ここで休もう……あの街の臭いは、最初はかなりきついからな」
「すいません……また、足手まといになってしまって」
健気に頭を下げるフィルデラに、ルアークは片目をつむって見せる。
「これは仕方がないことだから気にしなくてもいいさ。俺も最初来た時は同じだったんだから。しかもその時は風上だったから、街にかなり近づくまで臭いがしなくて、突然凄まじい臭気に襲われた俺は、胃の中のものを全部吐き……おっと」
「うっ……」
しまった……吐き気をもよおしている人間には、嘔吐を連想させるような台詞は厳禁だ。
「水を……水を下さい……」
ルアークは水筒を手早く取り出すと、フィルデラに渡した。
ごくん。
水を胃に流し込み、なんとか吐き気を堪え、フィルデラは苦しそうに吐息を漏らす。
「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」
ルアークは、そんなフィルデラを抱き寄せると、背中を優しくさすってやった。
「フィルデラ……ごめん……」
「いいえ……こちらこそ、ご迷惑おかけして……」
そう言って顔を上げたフィルデラは、吐息も触れ合わんばかりの位置にルアークを感じて、思わずほほを赤らめる。
その体勢はまるで、口付けをかわしあう恋人同士のようで……。
えっと……あの……どうすれば……。
あせりまくったフィルデラの脳裏に浮かんだのは『口付けする時

には瞳を閉じるのよ』という、テレシアの言葉だった。
そうだわ……瞳を閉じないと。
フィルデラに瞳を閉じられてしまったルアークは、彼女以上に慌てまくった。
え……あ……う……。
情けない、本当に情けない表情で、フィルデラを抱きよせたままルアークは硬直してしまう。
別に俺から誘ったわけじゃないぞ、彼女が誤解しただけのことで、俺から誘った訳じゃない。
自分自身に言い訳しながら、ルアークは心を決め、そっと唇を重ねようとする。
その時。
「おいルアーク、ルアークやないか？」
自分に対する呼び掛けに、ルアークははっと我にかえり、すばやくフィルデラの身体を離した。
「おっと……こりゃ、お邪魔さんやったかな？」
そう言ってにやにや笑う悪友の顔を見て、ルアークは自分の不運さを嘆いた。

※

「おまえにも、ようやく、春が来よったか……」
うんうん。
ひとりで納得してうなずく悪友、ディース・キャプタムに、ルアークはげんなりとしてため息をついた。
フィルデラは、突然現れたその男に、警戒心あらわな視線を向ける。
栗色の髪と瞳を持つ、この男の年の頃は二十代前半くらいだろうか？
色男……そういう形容がぴったりあてはまる。

容姿の端正さだけなら、ルアークの方が優っている。
しかし、身にまとう雰囲気がいかにも、それっぽい、のだ。
「いやあ、おまえは一向に女に興味示しよらへんから、ほんまは危ない趣味の人ちゃうんかいな思て、心配しとったんやで。そやけど安心やな。神殿に忍び込んだついでに、巫女さんかどわかして来るくらいなんやから、もう充分、軟派道の初段をやれるで。これからも精進せいや」
……何かが、何かが違うような気がする。
頭を抱えてため息をつくルアークと対象的に、フィルデラは怒りに声をあげた。
「違います！　ルアークさんは私をかどわかしたりなんかしていません。私は自分の意志でルアークさんについて来たんです。訂正してください。ルアークさんに失礼です！」
しかし、そのフィルデラの怒りも、その男の分厚い面の皮は突き通せなかったようだ。
ディースはにやりと唇の端をつりあげると、諭すようにフィルデラに言う。
「可哀想にな……こんな悪い男に騙されて。こいつは、ほんまにたちの悪い奴なんや。こましては捨て、こましては棄て、これまで泣かした女は数知れず。実は子供も数人いてるんやで、ほんまに悪い奴やろ？」
「そうですね、ディースさん。あなたは、本当にたちが悪いみたいですね」
きっぱりと言い切られてしまって、さすがのディースも絶句する。
「う～ん……。可愛い顔して、なかなか言いよるなあ……」
苦笑してディースは、くしゃくしゃとルアークの髪をなでまわした。
「ルアーク、なかなかしゃんとした、エェ娘捕まえたやないか」
何だかとてつもない誤解をはらんでいるような気がするが、ルアークは何も言い返せない。

とにかく、あの時ディースが声をかけなければ、フィルデラの唇を奪っていたのは確かなのだ。
あんな決定的瞬間を押さえられてしまっていては、どんな言い訳も通用しない。
そうだ……本当に自分はもう少しで、フィルデラの唇を奪ってしまう所だったのだ。
改めてそのことに気がついてルアークは、深々とため息をついた。
どんよりと沈みこんでしまったルアークは放置することにして、ディースはフィルデラに改めて自己紹介を始める。
「わいは、ディース・キャプタム。このどあほぅの親友で仲買をやってる」
臆面もなく親友だと言ってのけたディースに、ルアークがあからさまに厭そうな表情を見せる。
仲がいいのは確かだが、親友というよりも悪友と言った方がいいようだ。
「あの……えっと、私は、フィルデラ・リファンディエントと申します。光神殿で巫女をしてました」
「フィルデラちゃんか……エェ名前やな」
リファンディエント……！　五光公家か……。
小声でそうつぶやき、ディースは何か思案するような顔をする。
「あの……ディースさん、さっきどうして、私が巫女だったってことが解ったんですか？」
フィルデラの言葉に、ディースは笑って答える。
「解らんはずないやないか、わいはルアークの行き先知ってたし、もし知らなんだとしてもやな、フィルデラちゃん。あんたほど光の属性に溢れた人間は見たことあれへん。誰が見ても巫女さん以外には見えんわ……。んっ？　……ちょいまてや」
ディースは、地面に穴掘って埋まりそうな雰囲気のルアークを振り返ると、厳しい声で問い詰める。
「おいルアーク、おまえ、まさかとは思うけどやな。フィルデラち

ゃんを、このまま街に連れてくつもりやなかったんやろな？　少なくとも髪ぐらいは染めとかんと、えらい騒ぎになりよるんちゃうか？」

ディースの言葉に、ルアークははっとなって、やっと我に帰る。

「フィルデラちゃんは、ちゃんと自分の意志で考えて、おまえについてきよったみたいやけど、客観的に状況をみるとやな、わいがさっき言うたように、おまえがこの娘をかどわかしてきよった、と考えるんが普通なんとちゃうか？　名門、リファンディエント家の娘で巫女さんをかどわかしてきて、追っ手がかからんはずがあるか？

それに加えて、わてらの仲間の中にも、ちょっとでも神殿に関りあるもんは滅ぼしてまえって言う過激なアホも、ぎょうさんいてるんやで。そんな奴等がやな、おまえが巫女さんと駆け落ちしてきたって知りよったら、どないなると思う？」

「……」

多少……いやかなりの誤解があるような気はするが、基本的にディースの言い分はもっともである。

何でそんなことに気付かなかったのだろう、自分の馬鹿さ加減にルアークは唇を噛み絞める。

「まっ、そないに落ち込むなって。人間何事も、完璧ってわけにはいけへんのやから。神さんでも間違いだらけやのに、“力”はあってもただの人間に過ぎんおまえが、少々間違うたかてしゃあないわ。幸いまだなんも問題はおきへんかったんやろ？　後悔する暇があったら行動や。そこの小道をちょい行たとこに泉があるよって、そこで、染料つこて髪染めさせや。こんなとこにおったら、いつ人来るかわかれへん」

そのとおりだ。

ルアークは、顔をあげると、ゆっくりと、フィルデラにうなづきかけた。

※

ちゃぱ……ちゃぱ……
水音がする。
フィルデラは長い髪を水で濯ぐと、ゆっくりと、ルアークに手渡された染料をふくませた。
ええと……染料をまんべんなく髪にふくませたら、ゆっくり百数えろって言ってたわよね。
ひーい。
ふーう。
みーい。
よーお。
いーつ……。
指を折り折り、数を数え始める。
おかしな人……だったなぁ……。
くすり。
ルアークの『親友』、ディース・キャプタムと交わした会話を思い出し、フィルデラは思わず笑ってしまう。
でも、私とルアークさんが駆け落ちしてきただなんて、とんでもない誤解だわ……。
少なくとも、かどわかされてきた、というよりはまだましだけれども、どうしてそんな風に誤解されたのだろう……。
そこまで思考が及んでフィルデラは、自分がそう誤解されても仕方がない状況にいたということに、今ようやく気がついた。
そうだわ……私……もう少しでルアークさんと……。
みるみるうちにほほが染まっていき、耳まで真っ赤になる。
どくん……どくん……。
胸も早鐘をうつ。
どうして、私……。
少なくとも、ああいう状況で瞳を閉じるということは、口付けしてもいいわよ、という肯定の意味を示すということは、フィルデラ

も知っていた。
とにかく、あせりまくっていたとはいえ、自分は無意識中に、ルアークとキスしたいと思ったのだろうか？
私、ルアークさんのこと、好きなのかしら？
主観的には……解らない。
しかし、客観的に証拠のひとつひとつを検証していくと、どうも自分は、ルアークに恋愛感情を抱いているのではないかという結論に、達さざるを得なかった。
これが……恋……なのかしら？
そう認識した瞬間、フィルデラの心の中に、黒雲がわきあがるように、不安がたちこめだした。
ご迷惑じゃ……ないかしら？
フィルデラの心の中で、ディースのある台詞が反復される。
『わてらの仲間の中にも、ちょっとでも神殿に関りあるもんは滅ぼしてまえって言う過激なアホもぎょうさんいてるんやで、そんな奴等がやな、おまえが巫女さんと駆け落ちしてきたって知りよったら、どないなると思う？』
つまりは、自分はルアークの側にいるだけで迷惑をかけるのだ。
“過激なアホ”と、ディースは一刀両断しているが、フィルデラには彼らの気持ちが解るような気がした。
神の罪は許されるものではない、そして、そんな神に疑念も抱かずに従い続けて来た自分達の罪も……。
神に仕えている。
それだけの理由で憎まれていたとしても、至極もっともなことのように、今のフィルデラには思えるのだ。
その時！
（それは、違うわ！）
心の中に響く声、それは自分のものではない。
だれ？　あなたは誰？
突然心の中に割り込んできた侵入者に対して、フィルデラは厳し

く誰何する。
（ごめんなさい、またあなたを驚かせてしまったようね……）
あなたは……エメラーク……さん？
返事は肯定。
フィルデラの脳裏に送られるエメラークの意識は、封邪の間で卵を預かったときの、何倍も力強い。
弱々しく、今にも消え去りそうだった封邪の間の時とは違って、はっきりと“ことば”として形成されている。
もしかしたら、彼女は力を取り戻したのでは？
だが……そのフィルデラの淡い期待は、すぐに打ち砕かれた。
（お別れの挨拶を、言いにきました……）
エメラークの声が淡々とフィルデラの脳裏に響く。
……エメラークさん！
（本当に、あなたは優しい方ね……。ほとんど知らない私のことを、こんなに想ってくれているなんて……）
哀しみに満たされたフィルデラの心を、逆に、死にゆくエメラークが慰める。
そのエメラークの思念は純粋な優しさに満ちていた。
『おまえ等が彼女の何を知っていると言うんだ！』
ルアークの、怒りの言葉。
それが何度も、なんども、フィルデラの心の中でリフレインする。
私達は何も知らなかった、知ろうとさえしなかった……。
彼女の……彼女のどこが邪悪な存在だって言うの？
自分の愚かさが悔しくて、フィルデラはぽろぽろと涙をこぼす。
（泣かないで……泣かないで……）
困ったようなエメラークの思念。
（私のために、泣かないで……）
エメラークさん……。
暖かな思念に包まれて、フィルデラは涙をぽろぽろとこぼしながらも、小さく微笑んだ。

（フィルデラさん、息子をよろしく頼みます……）
静かだが暖かく深い、母としての思いを秘めたエメラークの思念に対して、フィルデラは神妙な面持ちで誓いをあげる。
「はい、私が責任を持って、育てます」
その時フィルデラの脳裏に、ちょっとした疑問が浮かんだ。
息子……さん、なんですか？
竜は産まれる前に性別が解るのだろうか？
フィルデラの疑問に、エメラークが笑って答える。
（ええそうよ……その子は男の子。名前はディーフィルといいます。もし私に似たならば、やんちゃで手のかかる子になると思うけど、よろしく頼みます）
その思念の中に秘められた、エメラークの我が子に対する愛情の深さに、また、フィルデラのほほを涙が伝いだす。
あなたの想い、必ずディーフィルくんに、伝えます。
だから、だから安心してください。
わたしが、あなたに出来ることは、これだけ、なんですから……。
フィルデラの必死の思いにうたれて、エメラークの思念が、柔らかく舞った。
（あなたは本当に素晴らしい女の子ね……。ルアークにはもったいないくらい……）
「エメラークさん！」
突然話を“そっちの方”にふられて、フィルデラは思わず声をあげた。
（ふふふっ）
フィルデラの初心な対応に、エメラークの思念が微笑むように揺れる。
（フィルデラさん。ルアークもよろしく頼みます。あの子は、あなたを必要としています。フィルデラさん……あの子は、決して悪い子じゃありません。ですけど……危険すぎるんです。あの子の力は、大きすぎるんです。もし、あの子が理性を手放したら、この世界は

滅びます。神への憎しみが、すべてへの憎しみに転化したとき、あの子はすべてを滅ぼします。さっき、なぜあなたの思考を否定したか、その意味が解りますか？　光の恩寵深いものが必ず正義であり、闇の恩寵深いものが必ず邪悪である。この図式が間違っていることは、今のあなたには明白でしょう。ですけど、これも知っていてください。被害者が総てにおいて正しく、加害者は総てにおいて間違っている。これも決して正しくないということを。被害者だからといって、無差別に憎しみをぶつけるならば、その時点で、あの、恐ろしい光に満ちた存在、加害者である神と、同じ過ちを犯すことになります。心に、憎しみという感情は必要不可欠なものです。ですけど、過度の憎しみは、心自体を狂わせます。あの子の憎しみを、あなたの愛で中和してあげてください。あの子には、あなたが必要なんです。あの子の孤独な心には、愛するものが必要なのです……）

エメラーク……さん？

そんなことおっしゃられても……。

私はともかく、ルアークさんがどう思ってらっしゃるか……。

（ごめんなさい……。突然、こんなことを言っても、戸惑うだけですね。もっと、ゆっくり伝えられればよかったのだけど……もう、時がありません。フィルデラさん、さようなら、あなたの前途が、幸福で彩られんことを……）

祈っています……。

残るのは、暖かな感触。

エメラークの魂の残した、あたたかな感触。

「エメラークさん……」

空を静かに見上げるフィルデラの濡れたほほに、風が冷たかった。

※

少し離れたところでフィルデラを見守っていたふたりは、彼女の様子がおかしいことに気付いた。

駆けってきたルアークの胸に、呆然と立ちすくんでいたフィルデラがすがりつく。
「ルアークさん。エメラークさんが……エメラークさんが、いま……」
亡くなられました……。
すべてを言葉に出して言う必要はなかった。
ルアークはぽろぽろと涙をこぼすフィルデラを、力強く抱きしめた。
「ルアーク、どういうことなんや！　エメラークに、何ぞありよったんか？　助けだせなんだことは解ってた。成功してたら、真っ先にわいに教えへんはずないもんな……。せやけど、フィルデラちゃんも……いったいどないなってんねん。まさかとは思うけど、ほんまにまさかとは思うけどエメラークは……」
そう言うとディースは、フィルデラの手首をつかんで乱暴に振り向かせた。
これまで、不敵な態度を崩すことのなかったディースの、フィルデラの手首をつかんだその手が、ぶるぶると小刻みに震えていた。
「なにがあったんや？　ほんまに、何がありよったんや……」
何かに脅えるように、ディースはつぶやく。
「ディース……」
「ディースさん……」
これは、私の義務だ……。
ディースにすべてを語るのは、彼女の、フィルデラの義務なのだ。
フィルデラは視線でルアークを制すと、ディースに向かい合った。
「お話しします。私が、知る限りのことを……」
ディースの瞳が、まっすぐにフィルデラに注がれた。
※
「さよか……」

フィルデラの説明が終わった後、感情のない能面のような表情のディースから、力なく、言葉がこぼれた。
「私は、私達は……」
ぽろ……ぽろ。
涙をこぼしてうつむくフィルデラを見て、ディースの表情に感情が戻る
「フィルデラちゃん……あんたが、エメラークのことで、責任感じる必要は全くあれへん……。悪い奴ははっきりしとる。フィルデラちゃんも、そいつの被害者なんや。そやから気にしたらあかんで」
ディースはフィルデラに優しげな視線を向けると、その一瞬後には、いつもと同じ、どことなくふざけているような、不敵な態度を取り戻していた。
「それに、フィルデラちゃん……。はよ髪すすいだ方がエエで。急がんとせっかくの綺麗な髪。だめになってしまうで」
「えっ！」
やっぱりフィルデラも女の子。
だいじな、だいじな髪が、だめになってしまうと聞かされて、慌ててすすごうとする。
だが……。
あまりに慌てたために、足がもつれて、頭から小川に飛び込みかけて……。
「きゃあっ！」
「フィルデラ！」
もう少しで川に落ちる……。そこで。
とっさに反応したルアークが、フィルデラをしっかりと抱きかかえる。
しかし……しかし、手を添えた場所が悪かった……。
フィルデラの二度目の悲鳴が辺りに響きわたる。
「きゃあぁ」
そして水音……。

フィルデラはなく、ルアークが。
フィルデラを支えたルアークが、彼女の代わりに、小川で水泳することになった。

※

髪をすすぎ、水を切って布で拭いた。
しっとりと濡れたフィルデラの髪は、茶色く染まっても、光を反射してきらきらと輝いている。
「う～ん……。まあ、こんなもんなんやろけど。もうちょい、なんとかならんかなあ……。そや、フィルデラちゃん、眉毛や眉毛。眉毛がきんきんやから、不自然なんや。眉墨で染めたるから、ちょっとまっとり」
そう言って、背負い袋から眉墨を取り出し、指先につける。
そして、フィルデラの眉をその指でなぞり、染め付けた。
「よし、これでエエやろ。顔ゆすいどきな」
ディースはそうフィルデラに告げると振り返り、木陰で着替えているルアークを呼んだ。
「おい、フィルデラちゃんの方の準備は終わったぞ。そっちはどないや？」
「こっちも終わりました。今行きます」
そう言って、服を着がえたルアークが、こちらに向かって来た。
「あの……ルアークさん、すみませんでした。また……また、ご迷惑をかけてしまって……」
気にするなよ……。
しゅん、としてうつむいてしまった彼女を、ルアークがそう慰めようとしたとき、ディースがしれっとして、口を挟んだ。
「フィルデラちゃん……。あんたが、責任感じる必要は全くあれへんで。悪い奴ははっきりしとる。フィルデラちゃんも、そいつの被害者なんや。どさくさ紛れにフィルデラちゃんの胸を触ろとした、

このアホがみな悪い！」
そう言って、げしげしとルアークの頭をどつきまわす。
ふふっ。
その様子がおかしくて。
ついついフィルデラは、吹き出してしまった。
「笑ってくれたな……フィルデラちゃん。泣いとっても、しゃあないで。エメラークかて、そう思とるはずや」
「そうですね……」
泣いたって、エメラークは戻ってこない。
ディースの言うとおり、エメラークもそんなことは、望んでないだろう。
ぎこちなくではあったが、もういちど、フィルデラはにっこりと微笑んだ。
「それでエエ。フィルデラちゃん……ルアークも、荷物の準備はできたな。さあ、出発や」
三人は街道へ戻ると『俗都デルシス』めざして歩き出した。

～幕間～（前書き）

～幕間～

「ねえねえ、ラディアス君。この幻像、もうちょっとでいいから大きくならないかな？」
臨場感ってものが欠けているのよね……。
勝手に押し掛けて来ておいて、さらに好き勝手なことをおっしゃるリ・セルテレシアに、イフェ・ラディアスは険悪な視線を向ける。
が、リ・セルテレシアは気付かない振りをしているのか、本当に鈍くて気付かないのか、にっこりと微笑んでいらっしゃったりする。
はあ……。
重いため息をついて、頭を抱えるイフェ・ラディアス。
「ラディアス君。疲れてるんじゃない？　あんまり無理しちゃだめよ」
誰のせいだ、誰の！
喉まで出かかった罵声を飲み込み、さらにどんよりと沈みこむ。
「でも、ラディアス君。やっぱりこの幻像何とかならない？　せっかくおもしろいのに、こんなことで、そのおもしろさが削がれるのって、絶対もったいないわよ！」
だから……この幻像は楽しむためのものじゃないんだってば……。
しかし、言っても無駄だと解っていたから、口に出してはこう言った。
「リ・セルテレシア。俺の力では、これが限界なんです。これ以上を望むなら、あなたが自分で何とかしてください」
そう言ってしまってから、イフェ・ラディアスは、しまった！と思った。
そのイフェ・ラディアスの言葉を聞いた瞬間、リ・セルテレシアが嬉しそうに、本当に嬉しそうに微笑んだのだ。
「そうよね……あなたはあんまり幻像の扱い得意じゃないし、ここは私の出番よね。まかせて、すんごい幻像を見せてあげるから」

薮蛇だったか！
「そんなに脅えないでよ、ラディアス君。だいじょぶだいじょぶ。へまはしないから」
その言葉に……その言葉に……これまで何度泣かされて来ただろう？
どうやったらそんなことができるのか？　何がなんだかわけ解らない失敗をやらかして、いつも『ま、いっか』の一言で済ませてくれるのだ。
絶対に信用はできない。
が、しかし……。
こうなったらもう、誰にも止めることが出来ないのだということを、これまでの経験から、イフェ・ラディアスは熟知していた。
悲しいことに……。
……。
こんな時、人間ならば神に祈るのだろう。
だが、神である自分は何に祈ればいいのだろうか？
仕方なくイフェ・ラディアスは、自分自身の運に、祈りを捧げた。
何も、起きませんように……と。

※

アヤシイ呪言とともに、リ・セルテレシアの『力』がほとばしる。
イフェ・ラディアスは、その『力』に、向こうの世界から転送されてきた映像をリンクさせた。
精一杯の抵抗で、やっと勝ち取った妥協。
それが、映像を向こうからこちらへ転送する役目は、イフェ・ラディアスが行なうことであった。
それさえ握っておけば、リ・セルテレシアがなにか失敗をやらかしても、あの世界に悪影響を与えることはない……はずだ。
だが安心してはいけない。

これまでも、こうしておけば絶対大丈夫だろう、という処置を巧みにかいくぐって、彼女の失敗は、大勢の神に迷惑をかけてきたのだ。
今度もそうならないという保証が、いったいどこにあると言うのだろうか？
絶対に油断は禁物だ。
はあ……。
何度目のため息だろう。
そんな、イフェ・ラディアスを慰めるように、小川のせせらぎが聞こえて来た。
顔をあげると、辺りは小川のほとり、だった。
驚いて周りを見回すイフェ・ラディアスに、リ・セルテレシアは、悪戯っぽく笑いかける。
「どう、ラディアス君。凄いでしょ？」
確かに凄い。
小川のせせらぎ、鳥や虫の鳴き声、梢を揺らす風。
まるで、その場に自分もいるかのような臨場感がある。
これは幻像の域を越えている。
だが、それに伴うリスクを考えると、素直に感動することもできなかった。
「ソウデスネ……確かに凄いデスネ……」
なげやりに答えたイフェ・ラディアスの耳に、小川の対岸から悲鳴が二度響きわたった。
「きゃあっ！」
・
・
「きゃあぁ！！」
どぼーん……。
おまえも……可哀想にな……。
小川に突き落とされたルアークに、イフェ・ラディアスは奇妙な

連帯感を覚えて、もう一度小さく、ため息をついた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8505z/

光と闇のはざまに

2011年12月29日15時49分発行